
-片思い同士-

momoco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- 片思い同士 -

【Nコード】

N1698D

【作者名】

m o m o c o

【あらすじ】

友達を続けてきたけれど、お互いに好きなことは間違いなかった。一言で、関係は変わらと思った。

向かう気持ち

このままもう2度と会えなくても、絶対忘れないって誓う。

悲しい予感が怖くて逃げた。

あのころは、逃げるほうが悲しいことだって、気づかなかった。

車を走らせるのは好きだ。

特にこれくらいの時間。

夕闇が迫って、後ろから何かに追いかけられそうなのこのスリル。

向かうは好きな女の子の元、とあつては気持ちが高ぶるのも仕方なかった。

車内の時計は6時40分。

7時の待ち合わせには遅れずにつきそうだ。

彼女のためにとった、免許。

彼女のために買った、車。

今日こそ、告白するつもりだった。

相手も自分のことを、好きでいてくれると思う。

女の子に興味なんてなかったケイジは自分の新たな一面に驚かされていた。

この町が好きだ。

大都会でも、田舎でもない。

レジャーランドや名所は少ないけれど、それでも必要なものはそろってる、この町。

刺激なんかなくても、生きていければいい。
彼女と一緒に生きていければ最高だ。

今、その夢が叶いかけている。

ニットのワンピースがちょっと窮屈だった。

歩き出してから気づく。

静電気みたいに体にぴたりと吸い付く毛糸の感触が気になって、モモコは足を止めた。

着替えに戻っても待ち合わせには間に合いそうだけれど、せっかくの食事だ。

新しい服を着たい、という気持ちが勝って、また歩き始める。

ケイジと初めて会ってからは4年を超えるが、出会った当初より今のほうが相手を好きだと思う。

なんに関しても飽きっぽく、面倒くさがりの自分が恋愛に関しては根気強い。

奇跡みたいだな、と思った。

でも、モモコは知っていた。

その関係が、新たな局面を迎える瞬間が近づいている、ということ。

4年前〜ケイジ

4年の月日はあまりに長い。
ケイジはため息をつく。

出会いは本当に偶然で、涙が出るくらい普通のものだった。

4年前、7月

ケイジはつい三ヶ月前に入社した会社で、大いにやりがいを感じていた。

仕事は楽しかったし、残業も嫌じゃなかった。

でも、ビアガーデン初日ばかりは仕事も早めに片付け、同期の男三人で飲みに出掛けることを決めていたのだ。

緩めた胸元に汗が流れるのを感じながら、ビールを一口。

幸せだ、と思う。

学生時代は毎日が酒盛りのようなもので、それに比べたら飲む機会は少なくなったのだけれど
今の方が一杯のうまさを感じる。

同期の二人も同じように満足げな顔をしていて、ケイジはますます気分よくジョッキを半分空けた。

三人がビアガーデンに来て一時間。
初日ということもあって客席はほぼ満員だ。

「仕事、はやく切り上げてよかったな」
と囁くケイジに、他の二人も激しく同意した。

ビアガーデンとは不思議な場所だ。

ところ狭しと並べられたテーブル、すぐそばで大笑いする人々、開放的な空間。

普段ならこんなにいるさくて近くに他人がいる場所で食事する機会はないだろう。（社員食堂は別かな）

自然とケイジたち三人も大声で笑い、たわいないお喋りに興じていた。

そんな時。

同期の一人、タツミの後ろからにゅっと手がのび、タツミの肩を掴んだ。

タツミが驚いて声も出ず振り向くと、女の子が二人、疲れきった笑みを浮かべていた。

4年前、モモコ

4年前、7月

とんでもなく暑い日だった、気がする。

そうだ、ビアガーデン初日だったのだから。

モモコはその日休んだ先輩の分の仕事が終わらず、やむなく残業することになった。

一緒にビアガーデンに行こうと約束していたカナコには申し訳なかったけれど

「一時間くらい本屋で待ってるよ」

と言ってくれたので、残業の後は予定通り飲みに行くことにした。

一時間の差はすごかった。

二人がついたときにはもう人、人、人…

空いてるテーブルなど1つも見当たらない。

「ごめんねカナコ、あたしが残業だったから…」

肩をすくめるモモコをものともせず、カナコは座席を探して人の波に入っていく。

モモコはすでにビアガーデンを諦め、別な店を考えていた。

（ここからなら歩いて十分くらいのところに、おいしいイタリアンがあるから…）

すでに騒音と人の多さにげんなりしていたモモコは、カナコに声をかけようとした。

その時。

カナコが近くの席の男性の肩に手をおいたのが見えた。

驚いたのは肩をつかまれた男性だけではない。
彼と一緒にテーブルにいた二人（男三人のテーブルだった）も、もちろんモモコもぎよっとした。

カナコは笑顔で言った。

「スズキ君！お願い、相席させて。」

こわばっていた男性の顔がみるみる笑顔になった。

「なんだ、ハマさんかぁー」

聞けば彼はカナコと同じ学校だったという、いわゆる同級生ってやつだ。

全員同じ年だと言うこともあり、モモコもすんなり溶け込むことができた。

スズキ君というカナコの同級生がつれていた他の二人もとても親しみやすく、全員で携帯のアドレスを交換した。

またみんなで飲みに行こうと言って別れ、帰宅したモモコはケイジからのメールを受け取った。

その日から二人の、

「友達付き合い」

が、はじまった。

キモチの問題／ケイジ

出掛けたイタリアンの店はほどよいこみ具合だ。

ケイジはさつそくメニューをのぞきこむ。

イタリアンに目がないのも、モモコとの大きな共通点だった。

うわ…

モモコが呟く。

「おいしそうだね!」

目を輝かすモモコに頷き、パスタとラザニアを注文すると、やっと落ち着いてモモコの事を見ることができた。

「あれ、ワンピース、かわいいね」

ケイジが言つとモモコはにっこり笑って頷く。

「なんとオロシタテ。」

オロシタテ。

だいこんおろしではないことは想像がつくが、ちょっとだけ考える。

モモコは察したのか、付け加えていった。

「今日はじめて着るの。見たことないでしょ?」

確かに、週一回以上のペースでご飯を食べたりカラオケにいたり（最近は車も買ったのでドライブもできるようになった）しているけれど、その服は見たことがない。

なんだか炊き込みご飯みたいな優しい色で（いわゆるベージュ？）、おっとりした外見のモモコに似合っていた。

「見たことない、似合うじゃないか」

誉めると、今日一番の笑顔を見せたモモコは、ビニールパックに入ったおしぼりを渡してくれた。

機嫌がいい証拠だ。

これなら今日の告白も成功だ、と思ったケイジの目に、飛び込んできた人影があつた。

「あ……………」

声にならない声をあげて一点凝視のケイジを見て、モモコもちらつと後ろを振り返る。

（うわ、見ないでくれ！）と願うが時すでに遅し。

モモコの目もその人物

ケイジの元彼女を、とらえたようだった。

ゆっくりと首を回してケイジを見据えたモモコは、

「挨拶しなくていいの？」と言う。

4年前、まだモモコと知り合った時には付き合っていた彼女。

モモコを好きになって、別れを選んだ彼女。

モモコはその元彼女を見たことがあるし、別れたときもちろん報告した。（なぜ別れたかまでは報告できなかったけれど）

前はゴージャスにまいていた髪を、今はさらっとストレートにして、4年前よりちよつと幼く見える。

向こうは女二人。

ケイジは別れた彼女と親しくするつもりはなかったので、

「いや、むしろ見つかりたくない」

と肩をすくめた。

モモコの目がちよつと見開かれ、何かいいかけたように見えた唇は時間が止まったかのように動くことはなかった。

キモチの問題〜モモコ

「いや、むしろ見つかりたくない」と肩をすくめるケイジを、モモコは凝視した。

（そんなに嫌な思いでもあるのかしら…）

そういえばケイジが別れた理由を聞いたことがなかった。別れたという報告をつけたあと、何度か聞きたいとは思ったが。

ケイジの元彼女が、こちらに気づかず（もしかしたらもう忘れたのだろうか、それとも気づかないフリだろうか？）離れた席に座ったのを確認して、モモコは言った。

「4年もたってるから聞くけどさ、ケイジってどうして彼女と別れたの？」

瞬間的にケイジの顔がこわばるのが見えた。

（しまったなあ…）

やっぱりなんかされたんだろうか？

例えば浮気とか…

そこまで考えて、モモコは過去の自分を思いだしかけ、いそいでその思い出から離脱した。

取り消したくても口から出た言葉はもう戻らない。
モモコは返事を待った。

「うーん…特に理由はなくて、ちよっぴりわがままだけどきれいでいい子だったんだ。でもなんか、そうだなーマンネリっていうのかな？」

心が沈むのがわかった。

確かにすごく綺麗な女性だった。

もう一度振り返りたい気持ちを必死に押さえる。

「お互いに何かしら感じてたんだと思う。違和感みたいなの…決定的になにかあったわけじゃないんだよ。」

話し続けるケイジの声が遠く聞こえた。

モモコは過去の自分に蟻地獄のように飲み込まれる心を感じながら、ケイジに向かって微笑んで見せた。

探りあい〜ケイジ

ほっとしていた。

モモコが急に彼女と別れた理由を聞いてきたときはびっくりしたけれど、こわばっていた表情が戻ってにっこりしてくれたときには全身から力が抜けたようだった。

今になって汗が噴出してきた気がして、モモコにさとられないように手のひらの汗をぬぐう。

（過去のことなんだから・・・今はモモコがすきなだけだなあ）

思いをこめてモモコを見つめるが、モモコは笑顔を浮かべたままテーブルを見つめていた。

その肩が、震えたように見えてケイジは目をこらしたが、特に変わった様子はない。

見間違いだっただろう。

そこまで考えて、ケイジは今日の告白についての思いをめぐらした。

（うーん・・・さっきまではいい雰囲気だったけど・・・）

モモコはまだ顔を上げない。

（やっぱり元彼女と会った後に告白するってのもなあ・・・）

これからだってチャンスはめぐってくるだろう。

せつかく4年もかけて作り上げた関係だ。

ちよつとでもマイナスの要素があつた今日は取りやめるべきかもしれない。

でも、とケイジは思う。

（こんなことがあつた今日だから告白したほうがいいだろうか？）

モモコも自分のことを好きでいてくれるとしたら、今日はちよつとショックを受けているかもしれない。

そんなことないよ、モモコが好きだよ、と

こついつときこそ言つてあげるべきなのかもしれない。

モモコはかたくなにメニューを見つめている。

デザートのパージを見ているから、食事が終わつてすぐにさよなら、というつもりではないらしい。

さつきまで浮かんでいたはずの笑顔がもう消えているのにふと気づき、ケイジはあわててモモコに話しかけた。

「モモコ」

モモコは最初、焦点が定まらないような目つきでケイジを見た。

その目に恐れを見たような気がした。

（おびえてる・・・？）

ケイジがいぶかしげな表情になったのだろつ、モモコははつとしたように

「デザートも食べようかな！..」

と明るく話し始めた。

「あーこのパスタもよかったねー、これも、これもおいしいそう!!
今度は車でこないでお酒飲むのもいいね!!」

空元気、という言葉がぴったりなその様子を見て、ケイジは思い出した。

モモコの過去の恋愛を。

自分はモモコに「どうして彼女と別れたの？」
ときかれ、なんと答えただろう………？

取り繕うことに必死で、何も考えていなかった。
胸の中でシャボン玉がはじけたようだった。

今日の告白は中止、と、ケイジの心で判断が下された。

探りあいゝモモコ

気持ちが出むのを止める術はなかつた。

ケイジの顔もこわばっている。

あゝ、やっぱり態度に出ちやつた…

気づいたけれどもうおそい。

モモコは安堵すら覚えていた。

（やっぱりまだ誰かと付き合つのは、気持ちがついていかないかもしれない）

心が揺れていた。

明るい声を出してみても顔色が戻らないケイジに、モモコは正直に話すことにした。

「ケイジ…なんか気にしてるでしょ？」

「モモコは？俺無神経すぎ…」

用意してあつたような返事。
やっぱり気にしてた。

「俺、ちょっと動揺してた。別れた理由は一言では言えなくて、あんな風にごまかした。ごめん。」

頭を下げるケイジ。

謝らなくていいのに。

「ケイジ、あたしの…前の事、覚えてる？話したのは四年も前だね。」

「もちろん。」

その目に真摯な思いを見た気がした。

多分ケイジは、ほんとに何も考えずに返答したんだろう。

「なんで彼女と別れたの？」

気にするな、気にするな、と

モモコの中の誰かが言う。

でも。

モモコは感じていた。

もうケイジの事、好きになるのが怖くなった。

ケイジだって、あたしみたいに過去を引きずってまともに男性と付き合えない女なんてやめたほうがいい。

友達でいてくれるだけでありがたいんだ。

ネガティブな気持ちが押し寄せてきた。

たぶんこれは、モモコがケイジを本気で好きだったから。

これ以上はダメだ。

ケイジは爽やかで明るく、仕事も楽しんでやる模範的な男性だ。

失いたくない。

恋に落ちたとき、ケイジ

ケイジは心から後悔していた。

絶対、もう思い出させないぞ、って思ってたのに。

モモコの過去を聞いたとき、彼女は笑顔を作ろうと必死だった。でも、あふれてくる涙を止めることは成功しなかった。

ケイジはモモコが泣くのにまかせ、ただ話し終えるのをまっていた。

4年前の、冬だった。

モモコと2人の食事は6回目だった。

夏に知り合って、最初はメールだけだったけれど

その後何度か、ビアガーデンと一緒に飲んだ5人で飲む機会があった。

5人の集まりが3度目を迎えた後

それまで、女の子にそこまで興味があつたわけではなく

「彼女はほしいし、向こうが好きでいてくれるのだから自分も」
くらいの気持ちで付き合ってきた彼女と別れた。

そんな気持ちで何年も付き合ってきたのだから
今となっては申し訳ない気持ちで

だから、前の彼女には会えない、というのが本音だ。

モモコは、おとなしかった。

もちろん盛り上がり、水に水をさすわけじゃないけれど

話しかけられるまでは自分から話題を提供するようなことはなかった。

タクミの同級生だというカナコという女性は反対にとっても明るい人で

常に彼女を中心として話題は動いた。

カナコがモモコを守っているような、なんだか不思議な取り合わせだった。

カナコは華やかな美人だし、モモコもおとなしめではあるけれど聡明さを持ち合わせたまなざしがきらきらして見れば見るほど惹かれる。

ケイジがモモコに恋をしたのは、5人の集まりの2回目だったろうか。

タクミがモモコとカナコに、

「彼氏は？いるんでしょう？？」

ときいたときだった。

1 回目ときは場の空気を壊すことを恐れて誰もできなかった質問だけれど、

だいぶくだけてきたからだろう、タクミは今思い出した、という雰囲気ですらに質問した。

「いない」

答えたのはカナコだ。

そのあまりにきっぱりとした態度に男3人はあっけにとられた。

ケイジやタクミと同期の（男3人最後の一人）トモキは、カナコに惚れていたようだったので、そのきつい言動にびっくりしたのか、目が普段の2倍くらいになっていた。

カナコを包んでいた華やかなオーラは消えうせ、かわりに凜としたするどいオーラが彼女を包む。

ケイジはこんなときにもかかわらず、チェッカーの「さーわるもの皆傷つけた・・・」という唄を思い出していた。

（うひゃー、禁句だったんじゃないの？まずいよ・・・）

カナコは賢い女性だ、場の空気が凍ったのを察すると、とたんにこりとして

「あんまりひどいこときくんだもん！しばらくいないのよー気にしてるんだから！」

なんておどけて見せた。

男サイドもほつとして、「いや、ばか！高嶺の花なんじゃねーか？」なんて軽口をたたく。

ケイジもほつとした。

トモキなんて、目が潤んで泣きそうになりながらうんうん頷いている。

モモコを見ると、彼女はカナコの後ろに隠れるようにしていた。蒼白だ。

「大丈夫？」と声をかけようとしてとどまる。

カナコが男サイドから見えないような角度で、モモコのひじをさすってあげていた。

何かあるんだ、とわかった。

何もきかないことに決めて、またテーブルに視線をもどし、今までどおりカナコとの軽快なトークに加わった。

モモコの蒼白な顔は、どんな女性よりケイジを惹きつけた。

なぜか、どんな笑顔よりも女らしさを感じたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1698d/>

-片思い同士-

2010年10月26日05時25分発行